

和歌を探すには



和歌の基礎知識

和歌とは、一定の文字数で言葉を綴り表現する日本の古典詩です。中国の詩である漢詩に対して日本の詩という意味で和歌と呼ばれ、多くは5・7・5・7・7の31文字で作る短歌の型式をとります。古くは男女が詠み交わしたり、また歌合せや歌会が開かれ和歌が詠まれました。詠まれた歌は個人の歌集（私歌集）や勅命による勅撰和歌集に集められて収録されているものもあります。

図書館ではテーマごとに分類し番号をつけて書架へ並べてあります。詩/911、和歌/911.1、万葉集/911.12、古代・平安時代の和歌/911.13、中世・鎌倉室町時代の和歌/911.14、近世の和歌/911.15、近代の和歌/911.16に分類されます。棚を探す場合は、こちらをご覧ください。

(参考:『ブリタニカ国際大百科事典』 TBSブリタニカ)

市内の図書館で図書・雑誌を探す

◎索引を使って調べる⇒

() は中央図書館での分類番号です。

- 『新編国歌大観』 角川書店 1983 - 1992 (R911.10/シ)
全10巻。各巻は歌集と索引の2冊からなる。万葉から近世までの和歌を収録し、それぞれの歌には通し番号(大観番号)がついています。索引からは和歌のいずれの句からも引くことができ、原歌・作者・所収歌集を知ることができます。全巻に渡る索引はありません。
- 『典拠検索新名歌辞典』 中村薫／編 明治書院 2007 (R911.10/ナ)
上代から近世までの和歌8千首を収録。「総合索引」では、基本的に1句、3句、長歌の1句からその出典を引くことができます。
- 『日本古典文学大系索引』 別巻1・2 岩波書店 1976 - 1978 (R910.8/二)
『日本古典文学大系』に所収されている和歌・俳句・連歌などについて、「初句索引」、「語句・事項索引」、「総目録」から引けます。

◎辞書や事典で調べる⇒言葉の意味や大まかな内容を知ることができます。

- 『新編和歌の解釈と鑑賞事典』 井上宗雄／編 武川忠一／編
笠間書院 1999 (R911.1/シ)
記紀歌謡から現代短歌までの日本を代表する歌人335人、843首をとりあげた詩歌鑑賞事典です。歌人の生年順に掲出されており、各々は略伝・作品・鑑賞で構成されています。和歌の「初句」、「歌人」、「主要語句・事項」からも引くことができます。

- 『通解名歌辞典』 武田祐吉／著 土田知雄／著 創拓社 1990 (R911.10/タ)
万葉から近代までの名歌を収録した詩歌鑑賞辞典です。和歌を五十音順に配列し、通解、作者、出典が記されています。索引からは本書の和歌の全句、また歌人から引けるようになっています。
- 『和歌文学大辞典 Dictionary of WAKA Poetry』 古典ライブラリー 2014 (R911.10/ワ)
飛鳥時代以前から江戸時代後期(一部明治時代)までの古典和歌に関する人名・作品名・用語等の約 8200 項目について解説した辞典です。
- 『詩歌作者事典』 志村有弘／監修 鼎書房 2011 (R911.10/ト)
古代から現代に至る歌人、詩人(中国・日本)、俳人を各人物ごとに、名前の読み・生没・評伝・著作の順で掲載されています。
- 『歌ことば歌枕大辞典』 久保田淳／編 角川書店 1999 (R911.10/ウ)
和歌に使われる歌語・歌枕などを 50 音順に見出し語に取り上げ解説。
- 『例解短歌用語辞典』 窪田空穂／著 尾山篤二郎／著 創拓社 1990 (R911.10/ク)
短歌に使われる語彙について、語釈と例歌で構成されています。

◎テキスト⇒

- 『新日本古典文学大系』 岩波書店 1989-2005 (それぞれの文学作品の書架にあります)
- 『新編日本古典文学全集』 小学館 1994-2002 (それぞれの文学作品の書架にあります)
- 『私家集大成』 和歌史研究会／編 明治書院 1982 (911.10/シ)

市川市に関する資料

⇒図書館の地域行政資料コーナーに市川市関連の資料があります。

また、図書館ホームページでは「市川の文学データベース」で市川市を描いた作家と市川市に関する文学作品を調べることができます。

<http://www.city.ichikawa.lg.jp/library/db/1031.html>

- 『万葉の歌碑を訪ねて』 鈴木恒男／著 アムリタ書房 星雲社(発売) 1987 (I/D7)
- 『清川妙の萬葉集』 清川妙／著 集英社 1986 (I/D7)

インターネットを利用する

◎各機関や自治体のホームページなどから情報を得る

(2018.1 確認)

- 国文学研究資料館 古典選集本文データベース
二十一代集検索 <http://base1.nijl.ac.jp/~selectionfulltext/>
- 国際日本文化研究センター 和歌データベース <http://www.nichibun.ac.jp/ja/>



図書館では皆様の調べ物や課題解決のために様々なお手伝いをしています。

調べ方がわからない時は遠慮なくお問い合わせください。

また、図書館のホームページからもお問い合わせいただけます。

お問い合わせ：市川市中央図書館 047-320-3346

<https://opac.city.ichikawa.chiba.jp/winj/reference/entry.do>

和歌を探そう（実践編）



「真間の継橋」という句が入っている和歌を調べてみよう

真間の継橋とは？

JR市川駅から真間山を結ぶ大門通りを進むと、赤い欄干の小さな橋があります。これが「真間の継橋」です。真間の継橋は、歌川広重も『名所江戸百景』の中で当時の真間の継橋を描いています。（右図）



歌川広重「真間の紅葉手古那の社つぎ橋」

- 『新編国歌大観』で調べる。

各巻は、それぞれ歌集と索引で構成。各巻ごとの索引になっており、国書ごとに大観番号がふられています。

句の一部分が分かっている場合は索引で引いてみましょう。

『新編国歌大観』の使い方

索引編 『新編国歌大観』第3巻 [2] 私家集編 (p.968)

「**ままのつきはし** 133 拾遺愚 一一七五」



「索引編」で「ままのつきはし」を引くと、このように掲載されています。

「大観番号」「出典名」を手掛かりに「歌集編」に当たると和歌の全文を知ることができます。

歌集編

一一七三 拾遺愚草「拾遺愚」

一一七三	花にほふ四の天空	・	・	・
一一七四	とをあまりふたつのちかひ	・	・	・
一一七五	九重の花のうてなを	・	・	・

一一七三 命だにあらばあふ瀬を

一一七四 槇の葉のふかきをすての

一一七五 わすられぬ**ままのつき橋**

このような和歌があります

『新編国歌大観』

第2巻 私撰集編「万葉集」

あのおとせず ゆかむこまもが かつしかの
ままのつきはし やますかよはむ

第3巻 私家集編「拾遺愚草」

わすられぬ ままのつき橋 思ひねに
かよひしかたは 夢にみえつつ



- 『通解名歌辞典』で調べる。

和歌や歌人が分かっている場合は、こちらを使って和歌の解釈を調べることができます。
前述の『新編国歌大観』で確認ができた『万葉集』の和歌について調べてみましょう。

⇒足あの音せず 行かむ駒もが 葛飾の 真間の継橋 やまず通はむ

(訳：足音を立てずに行く馬がほしいなあ。そんな馬があつたら葛飾の真間の継橋を絶えず渡って通おうに。)

- ・ 継橋一河幅が広いので、板を継いで渡した橋。
- ・ 真間一千葉縣市川市。下総の国の歌。

- 『歌ことば歌枕大辞典』で調べる

「真間の継橋」(p.815)より

- ・ 最も早い作例と思われるものは、『万葉集』の東歌の掲載
- ・ 恋の*だいえい題詠歌が多い
- ・ 真間の継橋を題材に詠んだ歌人に、源頼政、藤原俊成、鴨長明、藤原雅経などがある

* **題詠**・・・前もって題を設けて詩歌を詠むこと。また、そのようにして作った詩歌。

(参考：『広辞苑』岩波書店)

Topics

「真間の継橋」を詠んだ和歌に恋の歌が多い理由として、『歌ことば歌枕大辞典』では「葛飾の真間が、大勢の男に求愛されながらも、苦悩の末に入水自殺をしたという手児奈伝説の地であることの影響であろう。」とある。

手児奈伝説

手児奈伝説とは、「手児奈という美しい娘がおりました。その娘の噂は真間の台地に置かれた国の役所まで伝わりました。すると、里の若者だけでなく、国府の役人や旅人までが噂を聞き手児奈に結婚を申し出ました。しかし娘はどんな申し出も断り、そのため病気になる者や兄弟喧嘩をする者達まで出てしまいました。それを見た手児奈は、悲しみ悩んだ末に入水してしまうのです。」
(参考：『市川のむかし話』市川民話の会)

真間の地には、この伝説が古くから伝えられており、知識層の人々の間では「真間の地＝手児奈伝説」が共通認識としてありました。そのため、「真間の継橋」を題材として詠んだ和歌の背景にも、この伝説が踏まえられ恋の歌が多く詠まれました。また、この話の中からは真間の地が現在よりも海に近く、入江であった様子など、昔の市川の様子が窺えます。市川の昔話については、郷土資料のコーナーや図書館のホームページをご覧ください。

- 『市川のむかし話』市川民話の会 2012 (I/D7)
- 『真間の手児奈』中津攸子／著 新人物往来社 1995 (I/D7)
- 「市川のむかし話データベース」

<http://www.city.ichikawa.lg.jp/library/db/1018.html>



亀井院境内「真間の井」
手児奈が使ったとされている井戸

上記を踏まえ、『万葉集』の和歌「足あの音せず 行かむ駒もが 葛飾の 真間の継橋 やまず通はむ」をよんでみると、真間の継橋を渡った先に恋する人の姿が思い浮かべることができます。